

大震災後の私たち真宗大谷派教団は、明確に「原子力発電に依存しない社会の実現」、つまり脱原発をめざす方向を示したのであります。特に 2012 年 2 月宗議会臨時会では、全会一致の議会決議を持ち、「福島第一原子力発電所の事故による被災者を中心とした復興支援」と定義し、1 億 9000 万円を基金化したことは特筆したい。時の総長は、原発の誤謬性とは「ヒバク」問題であると押え、「いのち」の視点に立つと明確に方向を示したことは歴史の評価に値します。そのための原発問題学習会を市民に公開しすでに 9 回を数え、大谷派教団の宗政と議会は遅々とした歩みであるが原発のない社会の実現に動きだしたと評価したいと思います。

だからこそ今重要なことは、脱原発を鮮明にしたこの教団を支えこの流れを推進する教学の構築であり、社会に向け発信する丁寧な教えの言葉が求められています。具体的には、教化研究 155 号特集「震災と原発」で現場の住職が、脱原発と語ることは、「これは結構、本当に勇気の要ること」（114 頁）と指摘するようにこの「勇気」に寄り添うことが教学の実践であり教団のお仕事でありましょう。全国の住職やご門徒がなかなか原発を問うことに戸惑いを感じています。原発震災 3 年が過ぎるなか「原子力発電に依存しない社会の実現」をめざす根拠となるべき教学の丁寧な積み重ねが求められているのです。

例えば、5 月 21 日福井地裁より判決が出た大飯原発 3、4 号機運転差止請求事件の判決文は、生活者の不安と疑問を明快に法律の理論と言葉で捉え直した丁寧な言葉でありました。みなさまぜひご一読ください。

さて「原子炉命名 仏教界の後ろ盾」なる 2012 年 11 月 12 日の朝日新聞記事で、「もんじゅ」「ふげん」と名付けた原子炉が福井県敦賀市に、また茨城県大洗町の新型転換炉「常陽」の名前は、当初「法蔵」と名付けられていたと命名にまつわるいきさつを知り驚きました。仏教学者でもある大谷派僧侶が命名に動きます。「ヒロシマ・ナガサキ」を経ても原子力の平和利用というまやかしに全く気づかず、「法蔵」命名問題をはじめ、安居での動燃理事の講演など大谷派教団や教団人はどのような関わりを持ったのかお聞きしたい。原子炉に「法蔵」と名付けようとした事実、大谷派教団は「原発責任」なるものを背負ったのではないかと考えます。御意見を頂きたい。

最後に、一昨日の質問者である宮本議員に指摘された、「聖人以後、教団指導層によって聖人への意図的反逆が行われた」と指摘された「宗門」という言葉の使われ方の確認をお願いします。総長の語る「そもそも大師号については近世以来宗門の積年の望みであった」と答弁された大師号を望む「宗門」は、宗祖の教えにない貴族性にどっぷり浸かっている姿であり、宗門総体を指すのではなく、宗門の一部それも教団指導層による聖人への意図的反逆である「宗門」ではありませんか。しかも、その根幹をなす教学こそが真俗二諦であり、現代の私たちの生き方にまで入り込んでいます。「国家こそ公である、それに対し宗教は私的な心の問題である」「坊さんは政治に口を出すな。ボランティアやデモに参加するのは仏教ではない」「お寺のご門徒には原発に賛成の人も反対の人もいるから、意見を言わない方がいい」と日常において語られる現実と教えは別物という考え、結果的に常に世間のありように隷属し仕えていく、その象徴が見真額であります。この教えと頭上の見真額に礼拝しながら戦争に突き進み、原発を受け入れる土壌を作ってきたではありませんか。見真額をただちに降ろしていただきたいのであります。

「見真額」「原発」「憲法問題」が惹起している今、宗門が抱える課題について、会派を超えて一歩踏み出す歩みを共にしていこうではありませんか。以上、私の質問といたします。